

井ノ内稻荷塚古墳Ⅱ

1997

長岡京市教育委員会

I 調査経過

1 第1次～第3次調査

井ノ内稲荷塚古墳は京都盆地西端の乙訓地域に所在する前方後円墳である(図1・2)。これまでは1960年代後半に作成された墳丘測量図があるのみで、詳細な実態は不明のままであった。その一方、古墳周辺では一帯に広がっていた竹藪の開発が進み、古墳が位置する環境は変化しつつあった。そのため、現時点でこの古墳にかんする詳細なデータを得ておくことは、今後の研究の進展のためにも、また文化財保護の観点からも欠かすことができない作業であった。

第1次調査は、大阪大学文学部考古学研究室が主体となって1993年に実施された。測量調査(3月15日～23日)および墳丘発掘調査(7月20日～8月11日)に分けて行われたが、その結果、古墳は後世にかなり削られていること、墳丘のほとんどは盛土で造られていること、埴輪や葺石を持たないことなどが判明した。

1994年には長岡京市教育委員会を主体とした第2次調査が実施された(7月20日～8月11日)。その結果、後円部に横穴式石室1基、前方部には少なくとも木棺直葬1基の埋葬施設が存在することが明らかとなった。また、攪乱坑内から出土した土器の状況から、横穴式石室の天井石が失われたのは、長岡京造営に関連した石材採取行為が原因であると推定された。さらに、墳丘の規模が全長46m、後円部径29.5m、クビレ部幅21.5m、前方部長16.5m、前方部幅29.5mであると復元され、またその築造の時期は6世紀前葉～中葉であると推定された。以上の第1次および第2次調査の成果は、「井ノ内稲荷塚古墳第2次調査概要—長岡京跡右京第478次調査—」(「長岡京市文化財調査報告書」第33冊所収、1995年3月)として公表された。

第3次調査(1995年7月21日～8月18日)は、引き続き長岡京市教育委員会が主体となり、横穴式石室の規模や別の埋葬施設の有無の解明を目的として行われた。この調査では横穴式石



図3 現地説明会(8月31日)



図4 木棺の取り上げ(9月6日)

室残存部上面までの掘り下げに止まったが、石室の全形が良好に保存されていることが判明した。またクビレ部墳頂では器台などの須恵器が集中して検出された。なお、この成果は『井ノ内稲荷塚古墳—第3次発掘調査概報—』(1996年3月)として公表された。

2 第4次調査

以上の3次にわたる調査成果をふまえ、横穴式石室の時期、規模、構造、および石室内部の残存状況の解明を目的として、第4次調査を実施した。調査主体は長岡京市教育委員会で、期間は1996年7月15日～10月4日の約2ヶ月半である。

調査は玄室奥壁上方にまつられていた祠の移設作業から始まった。攪乱坑の輪郭を検

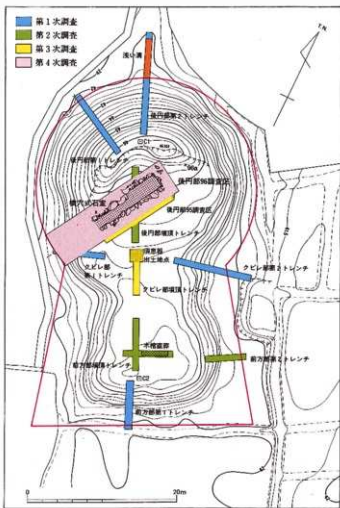


図5 トレンチ配置図

出したのち、石室内に落ち込んでいた多くの石室石材を除去しながら慎重に掘り下げを行い、床面近くに達したと判断できるレベルで土層観察用の畦を1m間隔に設定し直した。天井石がすべて除去されていたにもかかわらず、遺物の残存状態は良好で、各所に散乱する鉄製品や木質の検出には多くの苦勞が伴った。また組合せ式箱形木棺の棺材が良好に遺存していたことは驚きであった。途中、台風のために石室が水に浸かるという被害も受けたが、8月31日には現地説明会を実施することができ、350人あまりの参加者を得た(図3)。9月6日には、京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏の指導のもと、土層はぎ取りの要領で木棺を取り上げた(図4)。これらと並行して、遺物の取り上げ作業や記録作業を行った。その後、石室の実測図を作成し、玄室内部における断ち割り作業を実施した。そして、稲刈りも終わり秋風が涼しく感じられるようになった10月4日に、埋め戻し作業を含めたすべての作業が終了した。

II 横穴式石室の構造

1 発掘区の設定

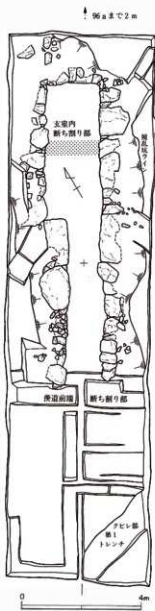


図6 後円部96調査区平面図

後円部の墳頂には小さな祠がまつられている。調査区（後円部96調査区、図6・7）は、それを移設したのち、第3次調査時の後円部95調査区（昨年までの後円部調査区を改称）を南北両側へ延長する形で設定した（図5）。

したがって、横穴式石室が位置する部分ではほぼ後円部95調査区と重複し、また、西側のクビレ部付近ではクビレ部第1トレンチの一部と重なっている。以上のように設定した今年度の調査区の面積は90㎡である。

横穴式石室は、その下半部のみが残存とはいえ良好に遺存しており、その保存を重視したため、石室の構築方法を解明するための断ち割り作業は、羨道前端部と支室内部の2箇所に止めた。その位置は図6に示す。また、前庭から墓道にかけては、墳丘盛土と後世の堆積土の区別が難しかったため、サブトレンチを多用して対処した。

2 石室の構造

稲荷塚古墳の石室は、後円部の中央に支室をおく右片袖式の横穴式石室である（図9・11）。主軸を北からおよそ31°東に振り、西側クビレ部に開口する。石室上半は破壊され残っていない。以下、第4次調査によって得られた石室構造の内容について、支室、羨道、前庭の各部分ごとに、その概要を報告する。なお、奥壁側を北、羨道側を南として記述をすすめる。

(1) 支室

支室の平面形は石室の主軸方向に長い長方形をなし、その規模は、床面における計測で長辺4.6m、短辺2.2mである。残存する壁体の高さは、最も残りの良い北西部分で1.75mをはかる。復元的に考えると、本来の石室の高さは、この2倍程度あったものと推定できよう。

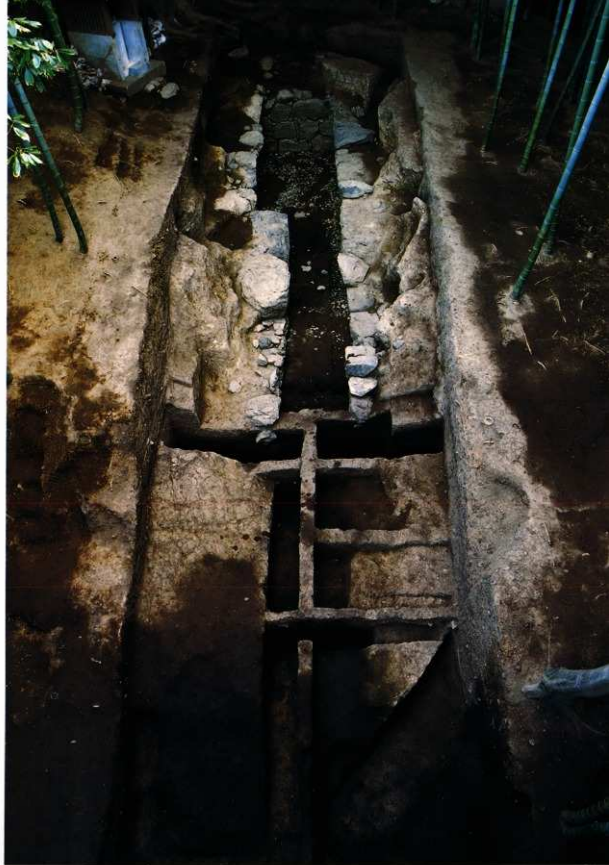


図7 後円部96調査区全景(南から)



図8 玄室全景(東から)

壁体は、大形の石材をおもに用いて構築されている(図10)。残存する石材のうち最大のものは、東側壁の中央部から玄門にかけて置かれた基底石で、幅2.5m、奥行き0.7m以上、高さ1m以上をはかる。ほかの部分でも幅1~1.5m、奥行き1m、高さ0.6m程度の大形の石材が用いられている。奥壁、両側壁とも、こうした大形石材を基底に据え、その上や隙間に小形の石材を小口積みしたのち、さらに大形の石材を積み上げるという工程が観察される。石材の目地の一部には、充填されたとみられる灰白色の粘土が残存していた。本来は、それが目地全体におよんでいた可能性を考慮する必要がある。持ち送りは、第2段目から始まるが、現状では東側壁に比べて西側壁の方がその傾斜は大きい。なお、奥壁では4段分、側壁では2~3段分の石材が残存している。

床面には径2~8cm程度の円礫が敷き詰められている。円礫の存在しない箇所が一部にあるが、盗掘時の攪乱によって破壊された可能性が高い。玄室中央部から玄門付近においては円礫の残存状態が良いが、これは、この部分に組合せ式箱形木棺が遺存していたためである(図8)。なお、玄室内で確認し得た床面は、この円礫面のみである。

(2) 羨道

長さ5.5m、幅1.3mをはかる。羨道の壁体は、開口部付近の一部に4段分残存する箇所が存在する。しかし、玄室に比べてその残りは悪く、基底石とその直上に小口積みされた小形の石材が残存しているだけの箇所もある。羨道の石材は、基本的に玄室のそれに比べて小さく、



図9 横穴式石室全景(北から)

幅0.6m、奥行き0.5m、高さ0.4m程度の中形の石材が用いられている。西側壁ではそうした中形、小形の石材の上に玄室の石材に匹敵するような大形の石材が積み重ねられている部分があり、東側壁でも石材の抜き取り穴から想定される石材の大きさは大形のものである。ところが、開口部付近の壁体は、残りの良い東側壁で判断する限り中形の石材を中心に構成されており、現状では大形の石材はみられない。石室のほかの部分とは壁体の構築手順が異なっていたことも考えられるが、これは今後の検討課題である。

羨道のうち、その玄門付近では、2面の床面が検出された(図12)。下層は玄室から続く円礫面であるが、その円礫は玄室のものに比べてやや小さい。一方、上層は淡黄白色の砂質土面である。羨道西側壁沿いで検出された刀剣などは、その位置への埋葬に伴うものと考えられるが、それらがこの砂質土面上に位置していることからみて、この面は追葬時の床面であった可能性が高い。また、棺台となる可能性の高い平石も検出されている。なお、開口部側にかけては、この砂質土層も下層の円礫も希薄になり、開口部より1mほど手前で消滅する。

閉塞施設は、その存在を積極的に裏付けるような痕跡を検出できなかった。玄門から約2mの地点のほぼ床面直上で長岡京期の土師器壺片が検出されていることからみて、閉塞施設をすべて除去するような徹底的な破壊をうけている可能性も考えられる。ただし、開口部付近で羨道を横断するような浅い溝状の遺構が検出されたことは重要である(図11・15)。円礫面がそれを越えて開口部側に認められないことや、開口部付近の壁体の構築方法が他の部分とは異なる可能性があることなどを考えれば、石や土を積み上げるといったものではなく、板などを立てるといった構造の閉塞施設が存在した可能性も考慮されねばならないであろう。

(3) 前庭

羨道前端部からすぐ南側に、上面で長さ1.2m、幅1.1mの窪地状の形態をなす遺構が存在した。そのなかから遺物は検出されなかったが、この部分が前庭である可能性が高い。また、その位置から西側のクビレ部にかけては、長さ1.5m、幅0.5mの溝状の落ち込みを検出したが、これが墓道であった可能性も考えられる。



図12 羨道の2面の床面(南から、左が砂質土面)



図13 西側壁下部の盛土(玄室内断ち割り部西側)



図14 玄室内断ち割り部(南から)



図15 羨道前端断ち割り部(南から)

(4) 石室構築過程

今回の調査では2箇所に断ち割り部を設け、墳丘および石室の構築過程を調査した。

玄室内断ち割り部(図14)では、玄室に敷かれた円礫面下部の構造が明らかとなった。すなわち、円礫面の下には非常によくしまった黄褐色の粘質土が20cmの厚さで水平に敷かれている。黄褐色土は上下2層に分割でき、石室は下層の黄褐色土の上に構築される(図13)。また、上下2層の境界で須恵器片が検出された。黄褐色土の下層には、70~80cmの厚さの黒色ないし茶色の盛土が存在し、その下に礫混じりの黄褐色砂質土の地山が存在する。

羨道前端断ち割り部(図15)では、羨道前端部分に限定されるが、石室構築過程の一端が判明した。古墳は水平に整地された地山の上に盛土を施すことによって構築されるが、その盛土を掘り込んで墓壇が形成される。墓壇の底には黄褐色の粘質土が敷かれ、羨道の幅を残して墓壇内にある程度の盛土がなされる。墓壇内の盛土のうち石材を積み上げる位置に当たる部分を若干掘り込み、その後石材を積み上げ、石材の背後に裏詰め土を入れる。このような手順で石室が構築されるが、ある程度の盛土を行ったのちに石室構築が行われる点に特徴がある。

なお、どちらの断ち割り部でも排水施設の存在を確認することはできなかった。

3 組合せ式箱形木棺

木棺は、^{びんしつ}玄室中央から^{びんもん}玄門にかけて、一部^{せんどう}羨道にはみ出すかたちで検出された(図16)。木棺主軸は石室のそれに平行せず、やや西に振っている。棺材の木質がよく残存していた。

木棺は^{くみあわ}組合せ^{しきせき}式^{せき}箱形^{あつかん}木棺である(図17)。鉄釘は検出されていない。北側(奥壁側)の^{くちりいた}小口板は^{せきばん}側板を外から押さえる形態をなす。一方、南側(玄門側)の小口には2枚の板が存在する。1つは側板を外から押さえる形態のもの、もう1つは側板の間にはさまれるもので、両者の間隔は約15cmである。このうち前者のものは側板と直接接していないため、当木棺に付随するものであると断定するには、厳密にいうとやや問題がある。ただし、これを埋没過程の腐朽などを原因とするものであるとみなすことができるならば、当木棺の南側小口には側板を外から押さえる形の^{くちりいた}小口板と、木棺内を区切るための仕切り板が存在したとすることができる。

木棺の規模は、長さ1.7~1.8m、幅40~50cmで、北側の幅が若干広がっている。小口板の長さは南北両側とも約60cm、仕切り板の可能性のあるものの長さは約40cmである。また、残存



図16 玄室と組合せ式箱形木棺(北から)

する木質の厚さは概ね1～2cmであるが、南北両小口板には10cmをこえる部分も存在する。

北側の小口板の上には、小口板や側板とは異なる別の木質が遺存していた。その木目の方向が木棺の長軸に平行することを重視すれば、蓋板の一部となる可能性が高い。また、木棺内部でも面的な広がりを持つ木質の遺存が認められたが、その性格は不明である。

北側小口板の東隅には、石室内に敷かれた円礫とは明らかに大ききの異なる石材が存在した。小口板がその上に乗ることから判断して、これは棺台として置かれた石材であると推定できよう。一方、木棺内部北側にも同様の石材が存在した。これら石材と木棺の上下関係は明瞭でないが、棺台あるいは枕石として置かれたものである可能性もある。

なお、木棺内から遺物は検出されなかった。また、前述したように木棺は、土層はぎ取りの要領で取り上げた。

以上に述べた木棺は、石室内のその位置から、追葬によるものであると判断できる。これ以外に、鉄釘など明らかに埋葬を推測させるような遺物は出土していないが、奥壁沿いの数箇所で面的に広がる木質が検出されたことは重要である。また、後述するように、羨道で検出された刀剣がその切先方向をそろえて整然と並んでいることから、その位置にも埋葬が存在したと推測できる。これらのことを総合して考えると、当石室内には、玄室の奥壁側に2体(玄室の長軸方向に2列)、玄室中央から玄門にかけて1体(組合せ式箱形木棺)、羨道に1体の少なくとも4体の埋葬があった可能性が考えられる。



図17 組合せ式箱形木棺全景(上が北側)

III 出土遺物

1 遺物出土状況

以下では主要な遺物の出土状況を概観するが、整理作業の進展でその内容を若干変更する可能性があることをあらかじめ断っておく。なお玄室側を北、羨道側を南とする(図20)。

玄室 奥壁沿いの西側では壺罍1点が出土した。木質が部分的に遺存する(図26)。一方、奥壁沿いの東側では鉢部の平面形が菱形を呈す雲珠のほか多くの馬具片が出土した(図27)。また、棺材の一部となる可能性がある木質も検出され、その下部からは50本以上の鉄鏃が重なり合った状態で出土した(図18)。この付近からは胡籥の一部と考えられる鉄地金銅張の金具も出土していることから、これら鉄鏃は胡籥に納められていた可能性がある。

奥壁から1.5m南の東側壁沿いでは、須恵器の広口壺や大型横瓶、土師器の直口壺が破片となって出土した(図19-30)。須恵器の西側では管玉1点が出土された。また、箱形木棺の北側では耳環2点が約40cmの間隔をあけて出土した。さらに、金製刀装具片4点が玄室中央部から奥壁西側にかけて散乱した状態で出土している。ただし、玄室中央部における遺物の出土は少なく、これら以外では杯蓋1点、高杯1点を含む須恵器片や鉄器片が検出された程度である。

木棺周辺では遺物が数群に分かれて出土した。まず、木棺西側の遺物は南北2群に分割できる。南群は袖部コーナー付近で、杯身、杯蓋、提瓶、広口壺、短頸壺、甌や鉄鏃、鉄斧などが出土した(図29)。北群はこの北側にある杯身、杯蓋、横瓶、高杯などのまとまりである。北群の須恵器の下部から西側壁にかけて、杏葉、辻金具、鞍金具などの馬具片が多数検出された。一方、木棺の東側では、有蓋脚付壺、小型甌を入れ子にした広口壺、小型高杯、鈴付甌、横瓶、すり鉢のほか杏葉片などが出土した(図31~33)。また、この須恵器群の下部からは、胡籥片および鉄鏃16点以上が検出された。特に側壁沿いで検出された胡籥の基部が立った状態であったことから、鉄鏃を納めた胡籥が側壁に立て掛けられた副葬状態を想定できる(図25)。これ



図18 玄室奥壁沿い東側の鉄鏃出土状況(西から)



図19 玄室東側壁沿いの須恵器出土状況(西から)

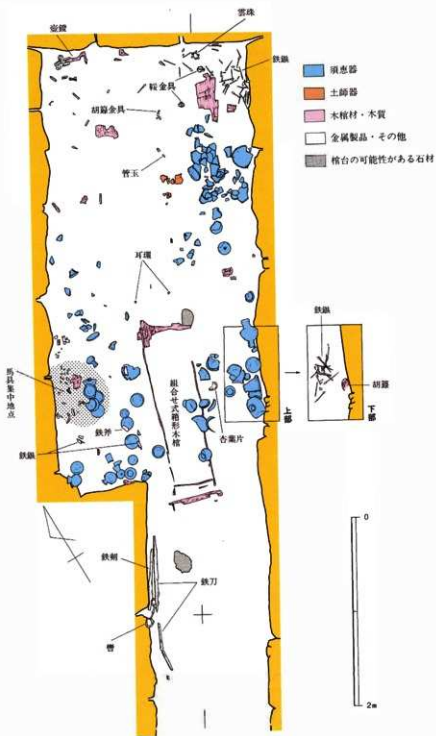


図20 石室内遺物出土状況実測図

ら木棺周辺の須恵器は、馬具や鉄鍔などの上部に位置しているため、追葬時の片づけ行為によって移動されたものである可能性がある。なお、木棺内部から遺物は出土していない。

羨道 玄門付近の西側壁沿いで、刀2点、剣1点が出土した(図21)。剣は北側に並ぶ2本のうち西側のものである。いずれも切先は北側に向け、刃部は東側を向く。刀剣の間では環状鏡板付轡（つづ）が出土している。これらはこの位置での埋葬に伴うものである可能性が高い。

2 遺物の種類と数

玄室と羨道、およびその他の地点に分けて、主要な出土遺物をまとめる。

〈玄室〉

装身具	管玉	1	須恵器	杯身	7
	耳環	2		杯蓋	7
武器	鉄刀片	15片		広口壺	5 (うち大型1)
	刀装具片	4片		直口壺	2
	鉄鍔	73以上		短頸壺	1
武具	胡録金具片	38片		有蓋脚付壺	1
工具	鉄斧	1		壺蓋	3
	刀子片	5片		無蓋高杯	2 (うち小型1)
	針状鉄器	1		有蓋高杯	2
馬具	壺鐙	1程度		高杯蓋	4
	雲珠	1		横瓶	3 (うち大型1)
	雲珠・辻金具片	数十片		提瓶	1
	杏葉片	多数		甌	3 (うち鈴付1、小型1)
	飾鉄	20		すり鉢	1
	鉸具	6	土師器	直口壺	1
	鞆金具	3			

〈羨道〉

武器	鉄刀	2	馬具	轡 <small>（つづ）</small>	1
	鉄剣	1			

〈その他の地点〉

武器	鉄鍔	2	工具	刀子片	1片
武具	胡録金具片	1片	馬具	壺鐙片	4片



図21 羨道西側壁沿いの刀剣・響出土状況(東から)

3 おもな遺物

(1) 装身具

管玉 (図22) 長さ2.3cm、直径8.5mmである。濃緑色の碧玉製で、光沢を持ち、整った円筒形をなす。片面穿孔で内孔径は1～3mmである。

耳環 (図23) 2点出土した。直径1.8～1.9cm、断面径2.5mmをはかる。2点とも外形は正円でなく、わずかな楕円形を呈する。1点は継ぎ目に1mmの間隔がある。銀製と推定される。

(2) 武器

刀剣 羨道西側壁沿いで刀2点、剣1点を検出した。南側の刀(図21の左)はその中心付近で屈曲しているが、復元すると長さ52.5cmとなる。茎と切先を欠損しており、刀身には鞘と思われる木質が付着している。北側の刀(同右下)は現存長74.8cmであり、切先を欠損している。茎尻の形態は隅扶尻である。剣は北側の刀の西側に並んで出土した(同右上)。切先を欠損す



図22 管玉出土状況(玄室中央部)



図23 耳環出土状況(玄室中央部)

る。現存長65.4cmである。ほかに玄室内で刀の破片を15点検出している。

刀装具 (図24) 4点の破片を検出した。幅5mmの薄い帯状の金製品で、両側辺を1~2mmの幅で折り返している。中央には直径2mmの円形文を1cmにつき4個、両側辺には長さ1mmの刻み目を1cmにつき15本程度施している。幅や文様の共通性から、4点は同一個体と考えられる。

鉄鎌 (図18) 多くは細片となって検出されたため、正確な個体数は不明だが、鎌身の数量は75点を数える。このうち長頸鎌は61点ある。完形品の全長は14cm前後で、片丸造りのものが多い。一方、平根鎌は14点ある。身は柳葉形で逆刺を持つ。全長12cm前後のものが11点、鎌身の長さが5cmをこえる大型品が3点ある。茎部に木質や樹皮の痕跡が遺存するものが多い。

(3) 武具

胡籬 (図25) 鉄地金銅張の胡籬金具片が39点出土した。そのうち吊り手金具の破片と思われるものが2点、帯状金具の破片と思われるものが37点ある。帯状金具は山形の突出部を持つもので、表面には波状列点文が刻まれている。直径4.5mmの鉄が打ち込まれている。裏面には布や木質が付着している。これらのほとんどは奥壁沿いの東側、あるいは木棺の東側で出土しており、両地点とも鉄鎌を伴っていることからみて、2個体の胡籬の存在を想定できよう。

(4) 工具

刀子 すべて破片で、6点検出した。鞘と思われる木質が付着するものがある。

斧 長さ8.5cm、刃部幅4.1cm、袋部の最大幅3.6cmの有袋鉄斧が1点出土している。

(5) 馬具

轡 (図21) 羨道西側壁沿いで出土した。銜は全長18.8cmで、二連式である。銜の両側に環状の鏡板が付く。片側の鏡板には立開が残存する。

妻籠 (図26) 玄室奥壁沿いの西側で出土した。心材の木部が一部残存する。この木心に鉄板が装着され、柄部には2環の兵庫鎖が連結される。残存長は約35cmである。

杏葉 緑金具や地板と思われる細片は玄室南半部から多量に出土したが、残存状態の比較的良好な杏葉片が箱形木棺の東側で1点検出された(図28)。緑金具は鉄地金銅張で、地板には黒漆の膜と金箔が遺存していた。最大径10.5cmの楕円形杏葉である可能性が高い。ただし、外周



図24 玄室奥壁西側付近の刀装具片出土状況



図25 木棺東側の胡籬出土状況(西から)

に1箇所の尖りを持つ緑金具片が近接する位置で出土しているため、これを同一個体とみなすのなら、心葉形杏葉となる可能性も否定できない。一方、木棺西側の北群須恵器の下部では、杏葉の三葉文部分の破片3点を含む多数の鉄地金銅張緑金具片および鉄製地板片が出土した。地板片には布が付着したものもある。

雲珠 完形に復元できる雲珠が玄室奥壁沿いの東側で出土した(図27)。鉄地金銅張である。鉢部は扁平で、その平面形は菱形を呈す。菱形の長軸は8.3cmをはかる。菱形の各辺に1つずつ、鈍角をなす2つの頂点に1つずつの計6つの脚が付く。

鞍金具 3点出土した。すべて鉄製である。玄室奥壁沿いの東側で出土した2点は一脚式で、座金具は失われている。他方、木棺西側の西側壁付近で検出された1点は二脚式であり、上述の2点よりも小形である。座金具が残存する。

鉸具 胡髹に伴うものとは輪金の形と大ききで区別できる。馬具の一部となる鉸具は鉄製であり、計6点出土した。玄室奥壁沿いの東側で兵庫鎖と組み合わせられた状態で出土したものは、刺金が残存する完形品であり、輪金の縦幅8.2cm、横幅4.3cmを測る。木棺西側出土の5点は輪金の縦幅5~6cm、横幅3~4cmであり、刺金が遺存するものとしもないものがある。

辻金具 完形品は確認されなかった。鉄地金銅張の爪形革金具15点と方形革金具6点が検出されている。また、おもに辻金具に関連すると考えられる黄金具は計30点出土し、その多くは2本1組で検出された。これらの大半が2本同一方向の刻み目を有す。

飾鉄 杏仁形飾鉄13点と円形飾鉄7点が出土した。前者には木質が付着するものが多い。



図26 玄室奥壁沿い西側の壺鏡出土状況(南東から)



図27 玄室奥壁沿い東側の雲珠・鞍金具出土状況



図28 木棺東側の杏葉出土状況(西から)



図29 袖部コーナー付近の須恵器出土状況(北から)

(6) 土器

今回の調査では須恵器42点、土師器1点が出土した。以下、各器種ごとに概述する。

須恵器 杯身は7点出土した。すべて底部3分の1程度に回転ヘラ削りが施され、口縁部の立ち上がりはかなり内傾する。また、3点の底部には直線のヘラ記号がある。そのうち1点は蓋と組み合わさった状態で出土し、内部に有機物が残存していた(図34・35)。杯蓋は7点出土した。うち1点は天井部と体部の境界に段を有し、口縁端部に面を持つ。そのほかは境界が不明瞭なもの、または凹縁のみとなるものである。直線のヘラ記号を持つものが2点ある。

無蓋高杯は長脚で2段透孔のもの、小型で菱形の透孔を持つもの(図32)が出土した。有蓋高杯は3段の透孔を互い違いに配し、脚部に密な波状文を持つものである。高杯蓋は天井部にカキ目を施したものと、直径が大きく天井部と体部の境界に段を有するものにわかれる。

壺は広口壺、直口壺、短頸壺、有蓋脚付壺の4種類が出土した。広口壺のうち1点は大型で、大きく広がる長い口縁部に直線文と斜線文を施したものである。脚付壺は体部に柵描列点文、脚部にヘラ描きの斜線文を施したものである。器高は32cmで、短い頸部を持つ(図31)。

甗3点のうち1点は鈴付甗である(図31)。底部に方形透孔を5箇所、円形透孔を2箇所に加え、陶玉を入れて体内部の中央付近で仕切っている。残り2点のうち1点は小型甗である。これは広口壺のなかに入れ子にされた状態で出土した。

横瓶は3点出土した。注目されるのは破片となって出土した1点(図19)で、胴部の最大横幅が約33cmの大型のものである。体部の内外面には明瞭なタタキ目を残している。

すり鉢は1点のみ完形で出土した(図33)。表面の片側には緑色の自然釉が少量に付着し、反対側の面には焼成時に付着したと思われる陶片が貼り付いている。

土師器 表面に粗雑なへら磨きが施された直口壺が、破片となって出土している(図30)。

さて、今回出土した須恵器は、おおむね陶色編年TK10型式期からTK43型式期に位置付けられるが、TK10型式期に併行すると考えられる個体は非常に少ない。ただし、第3次調査のクビレ部墳頂トレンチで出土した須恵器がTK10型式期に相当し、そのなかの高杯形器台とセットになる可能性のある大型広口壺が、今回玄室内で検出されていることは重要である。この点を含め、出土したすべての須恵器を総合的に考察することは今後に残された課題である。



図30 土師器出土状況(西から)



図31 木棺東側の須恵器・鉄錫出土状況(西から)



図32 小型高杯出土状況(木棺東側、西から)



図33 すり鉢出土状況(木棺東側、西から)



図34 壺杯出土状況(袖部コーナー付近、北から)



図35 図34の杯内部に遺存していた有機物

IV 総 括

今回の第4次調査では、稲荷塚古墳の中心的な埋葬施設である横穴式石室の内部の調査を実施した。2ヶ月半に及んだ調査で得られた情報は膨大であり、その整理、検討作業にはさらに時間を要するが、ここではその基本的な内容を示しつつ、いくつかの注目点をあげてみよう。

石室は西側のクビレ部方向に開口する石片袖式の構造で、全長10.1m、玄室長4.6m、同幅2.2m、羨道長5.5m、同幅1.3mをはかる。前回の調査では残存する石室の上面を検出し、石室基底が地山面にまで達しているものと仮定して玄室床面長5m程度の規模を推定した。調査の結果、基底石は地山上に積まれた盛土内に据えられていることが判明し、実際の床面も予想より浅い位置となったため、平面規模は当初の想定よりやや小さいものとなった。しかし、なお横穴式石室としては大型の部類にはいるものであり、全長40mあまりの前方後円墳の埋葬施設として遜色はない。築造時期についても、石室内からTK10～TK43型式期の須恵器が出土したことから、ほぼ6世紀前半の内に考えてよいだろう。桂川右岸の乙訓地域では、向日市物集女車塚古墳と並んで最古の横穴式石室墳であり、この地域ではまず有力首長墓から横穴式石室という新しい葬制の採用が始まったことを示している。

石室構造の特徴としては、上述のように地山上に盛土をいったん積み上げた後にあらためて墓壇を掘削している点、基底石に特に大きな石材を使用する傾向がある点などがあげられよう。前者は、石室の強度面からみるとやや問題のある構築法といわざるを得ない。墳丘上半が削平されているため、石室墓壇の掘り込み面はわからないが、むしろ伝統的な竪穴系の埋葬施設を築く手法との共通性が想起される。また、後者は畿内のこの時期の一般的な石室構築手法とは異なる特徴であり、その技術系譜について検討を要する。

石室内には、追葬を含めて計4体程度の埋葬が行われた可能性が高い。このうち玄室南部に遺存していた箱形木棺は、釘を用いない組合せ式のものであった。木質が壊れていたため部材の結合方法は明らかではないが、小口部分は側板を外側から小口板で押さえる構造であったと考えられる。これは、奈良県三倉堂遺跡で発見された古墳時代後期の木棺や、当古墳の前方部埋葬において土層観察から復元される木棺の構造と類似している。このことは、横穴式石室の導入時に従来からの伝統的な直葬用木棺を小型化して石室内の埋葬容器に用いるという対処があったことを示している。畿内の横穴式石室にはその出現期から釘結合の木棺が伴う例が知られているが、乙訓地域では初期の例である当古墳や物集女車塚古墳では釘は用いられない。

すでに盗掘を受けて副葬品の状態はかなり乱されていたが、断片的な残存資料のなかに、金銅製の馬具、胡録金具、金製の刀装具などの破片が含まれていたことは重要である。特に打出文様を施した金製刀装具片の存在は、本来この古墳に装飾付大刀が副葬されていたことを示唆

しており、慎重な調査にもかかわらず玉類が1点しか検出されなかったことを勘案すると、中心被葬者がより武人的な性格を持っていたことをうかがわせる。

では、このような特徴のみられる稲荷塚古墳の存在は、乙訓地域の古墳時代史のなかにもどのように位置づけられるであろうか。

この地域では4世紀においては東部の向日市域に有力な前方後円(方)墳が継続的に築かれるのに対して、5世紀になると前方後円墳の築造される地域は西部の長岡京市域に移動する。6世紀前半には、再び向日市域に復元長48mの物集女車塚古墳が登場するが、その前後にこれに連なるような首長墓系譜は付近には認められず、やや孤立した存在である。これに対して、稲荷塚古墳が築造された長岡京市北部一帯は、まさにこの時期から活発な古墳の築造が始まり、後続する前方後円墳である井ノ内車塚古墳や多数の小規模墳の造営に示されるように、継続的な勢力の存在を考えることができる。さらに、近年「長岡京市史」編纂に伴う史料調査で明らかになった付近の近世絵図に、「親王御塚しんのうのみづか」「塚」という2基の前方後円墳らしき墳墓が描かれていることも注目される。現在その地点は明確にしがたいが、平野部に築造されていることからみて、5世紀以降の古墳である可能性が高い。今後、これらの実態解明が進めば、6世紀における長岡京市北部一帯の勢力図をさらに明らかにすることができるであろう。

乙訓地域における首長墓のこのような推移は、たんに地域内部の主導権争いという側面だけでは説明しきれない動きである。すでに4世紀と5世紀の当地域の首長系譜の変動については、畿内中央政権内部での権力移動と関連のあることが説かれている。6世紀以降の向日市域の物集女車塚古墳や長岡京市域北部の有力古墳群の登場は、地域内の新興勢力の台頭と呼ぶにふさわしい動きであるが、これらについてもやはり地域を越えた広い視点で今後検討を加えていくことが必要である。大和に本拠を置く以前に一時的にこの乙訓の地に宮を造営したと伝えられる継体大王ついでの活動を考古学的にとらえることもその重要な作業の1つである。乙訓地域についていえば、6世紀前半の横穴式石室という新たな葬制を採用する新興首長の出現こそが、こうした列島内の政治変動と関連した事象であった可能性が考えられるのである。



図36 発掘調査中のひとこま(第4次調査)

INOUCHI-INARIZUKA TUMULUS II



March 1997

**Nagaokakyō Municipal Board of Education
Kyoto Prefecture JAPAN**